

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換米認許第六二七号
平成二十七年十月一日発行(第四百十八卷第十号)

ホトトギス

十月号



俳句随想〔四百〕

汀子

句稿を拝見して訂正しなければ選べない一句に「無季」の句がある。花と言えば桜の花のことである。しかし、花びらでは無季になる。又、花筏は川面に散った花が筏のように流れていくのをいう人がいるが、他に紋所を言い、油性香料の名、ミズキ科の落葉低木の名、初夏、葉の上の中央に小花をつけ、花を乗せた筏に見立てた植物があるのが昔から有名である。花筏を花屑と直して選ぶこともある。添削は余りしたくは無いが、花筏を花屑とした方がより現実的な情景描写となる場合が多い。通信欄でお尋ねになったことを私の独断でお返事致します。「質問①―本人の体験ではなく、他の方の身になって作った句は実感句とはいえないのでは?……句会などでこの方の句?と思っていたら思いがけない方の句だったりします。……答え……自分がその人に成り代わって作る俳句は特にいけないとは言えません。でも私はそのようなことは致しません。「感想②―大会に参加して句友を広げております。自分の句は大会向けではないと自覚、吟行して自然にふれ温かい人にもみえ、会場の緊張感に脳が活性化され、選に入った方の句に感嘆して幸せ。……との感想を寄せられました。……お返事……大会で何か一つでも新しい感動を学んで下さい。大会向けの句などは無いと思います。……」

自選の難しさは句会、或いは大会で出句する時に勉強になります。感動の大小に拘わらず物をしっかり観ること。私は「見るより観るへ」と言っております。

旬日記 汀子

平成二十六年十月四日 芦屋ホトギス会

新米として 水加減炊き加減
台風や予定ありてもなき如く
菊活けて菊の心に従へり

十月五日 下萌句会

どこまでも 旅路彩る芒かな
うそ寒き噴火の山と聞くばかり
芒叢そこは風棲むところかな
水音の変わることもなく水澄めり
風音のやはり台風来るらしく

十月六日 ロイヤル吟行会

些事雑事台風通り抜けにけり
会場は紺白百の秋灯
台風は今日の辺りしづもりぬ

十月七日 大阪倶楽部

育て来し菊活けしより今日の客
秋の晴昨日のことはもう忘れ
冷やかに昨日の一日ふり返る
台風の通り抜けしと言はずとも
菊育て来しことも告げて庭案内
台風のかけらも残りをらぬ空

十月七日 綿業倶楽部

一叢の芒に宿る心あり
霧湧きて霧に従ふ心あり
山路行く霧の去来も承知して
六甲の霧の怖さをあなどらぬ

霧の中迷はず下山せしことを
十月九日 清交社

靡くものふえつつ秋の山路かな
手入れして二三転がる新松子
やや寒の月食を見る身ごしらへ
きざはしを往き来やや寒纏ひつつ
やや寒の星のきざはし一人占め

十月十日 工業倶楽部

賜ききと狭庭彩るものとなる
家中が新米を炊く匂ひかな
十月十五日 夏潮句会

叡山の山路の紅葉一人占め
山深き野菊にカーブ又カーブ
台風の残して行きし山の雨
迷ふなく西の虚子忌へとの山路
新米の御齋に心置くことも
嵐去り静かな西の虚子忌かな
足許の野菊忌日の心置く

十月十六日 クラブ合同

横川路の野菊に心置きて訪ふ
一步二歩三步に野菊又野菊
嵐去り鷹渡る空ととのへり
秋思などなかりし如くありにけり
空見えぬとき足許の野菊叢

十月二十一日 有恒俳句会

うそ寒し閑散とした山路とは
コスモスの色を分けゆく風の先
みちのくははや紅葉濃し雨もよひ
完全といふ不完全うそ寒し
十月二十一日 無名会

冷まじや山路を一人運転す
靡くもの大方芒なりしかな
雨も又紅葉色濃くなる山路
冷まじや日帰り遠き旅路にも
旅先の芒をつなぐ家路かな
冷まじやみちのくで逢ふ旅の友
芒とは靡く心となりてより
十月二十三日 きつこぎ句会

風荒れて大方橡の実の落ちし
冬仕度ともなく部屋を片付けて
台風の前報聞きつつ従へる
冬仕度より先にする用ばかり
旅先の紅葉家路の薄紅葉
十月二十三日 アネモネ句会

ひそかにも野菊咲き継ぐ山路かな
えにしとはここに果つるもそぞろ寒
紫は闇に沈みぬ野菊叢
客を待つその日の顰蹙よそぞろ寒
月蝕の秋の夜空を楽しまむ

十月二十四日 時雨句会

小鳥来よ嵐の去りし庭の面に
探しものばかりしてゐるうそ寒し
稿債の果てざることもうそ寒し
十月二十六日 年尾忌

記念号読み返しつつ年尾の忌

露けしや通行止の山路とは
今日晴るるための風ありし山
邂逅の芒は眼りをりし摩耶

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年十月二日 蕉心会

君達も行くところへ行けば稲雀
鉢植といへど稲穂は和の心
萩に来て風は僕となりけり
鯊掛かるより饒舌となる水面
爽やかにサキソフォオニスト集ふ館
萩に来て固まつてゆく羽音かな
白萩を抜けば紅萩に辿り着く
秋の声芭蕉を綴る音楽家
妻夜長昨日スペインより帰国

十月四日 芦屋ホトギス会

飛ぶものに跳ぶものに秋郊自在
菊日和連れて和装の伴明子
十月五日 野分会音屋例会
毒茸の色が蹴られてゆきにけり
虚子館に一枝舞ひ込み松手入
茸飯食ベスペインのチョコも食ベ
松手入風喜んでをりにけり
十月五日 虚子記念文学館授句

松手入海岸線を傾けて
十月六七日 徳源寺句会

鎮魂の色を極めて十三夜
花野めくゴルフコースの一部分
十月九日 土筆会
小鳥来る山の消息携へて
初鴨に江戸の庭園引き締る

十月九日 「俳句さく吹く」収録
青い鳥消えゆく先の紅葉谷
十月十日 カトリック新聞選者吟

爽やかに列福式の旅に発つ
十月十六日 「俳句界」投稿欄選者新作
陸奥の車窓一面稲の秋
遠景の山を伽とし稲筵

一本の鉄路貫く稲田かな
駅を出る一步に香る稲の秋
陸稲には陸稲の主張ありにけり
役終へて星と存問する案山子
稲刈りて日の本の四季締め括る
刈田道風が迷うてをりにけり
風を読み日を読み稲を掛けにけり
きりたんぼ食べれば偲ぶ君のこと
十月十六日 登高会

陸奥へ鉄路一本稲の秋
リーデルのワイングラスの柄の秋思
稲筵越の山々遠ざけて
声掛けて声掛けられて秋思解く
大嵐忌日攫つてゆく秋思
崩れ築川の表情戻りゆく
十月十六日 NHKテキスト選者の一句
どう見ても我に似てゐる福笑
十月十七日 北國文芸選者吟

陸奥の稲の香纏ふ旅路かな
十月十八日 ホトギス社句会
鶺鴒の好みの石のあるらしく
紅葉山暮色包んでゆきにけり
濃紅葉に虚子の涙の三粒ほど
冷まじや政府へ金を売る話
十月二十日 朝日カルチャー若草句会
タイガース日本シリーズでふ夜寒

靴音を天に預けて鴉の賛
靴音の後ろから来る夜寒かな
一声を残して鴉の消えゆけり
忌心を解き夜寒のネオンへと
木の実落つ平均律を響かせて
鴉高音都心の朝を脅かす
十月二十一日 むさし野吟行会

朝寒の森に吸はれてゆく佳人
深秋の森に入れば森の声
深秋の森に吸はれてゆく佳人
末枯も華やぐ森の色として
虚子学ぶ年尾忌前の都心かな
十月二十二日 目黒学園句会
この冷にこの雨風に秋惜む
新米をむすぶ手捌き母の味
温め酒とは銘柄にこだはらず
温め酒六甲おろし歌ひつつ
新米に塩一振りといふ至福

十月二十五日 「四紅二十周年祝句」
二十歳を照らし続けて初明り
初刷を二十歳重ね来し歩み
楫に確と未来を見てをりぬ
言葉の幸ふ国の二十の春
初暦てふ誌齡祝ぐ一頁
十月二十八日 年尾忌

時鳥草皆天を向く忌日かな
あの日草皆天を向く忌日かな
アロ野球まだまだ佳境年尾の忌
十月二十八日 若水句会
のぼさんの伊予はまほろば柿の秋
身に入むや一會中止となる嵐
身に入むや三十五年てふ月日
晩稲刈る越の山々白く染め
柿食へば子規も聞きたる鐘の音

雑詠 廣太郎 選

かたかごの花せゝらぎの音の中 周南 小川龍雄
 踏絵見て空の眩しくありにけり 同
 人生の初の緊張入学子 吹田大橋 暁
 花はさて先づは一献花筵 同
 そよ風にさへ柳絮飛ぶ中之島 同
 点滴の窓は北向き春嵐 渋川 木暮陶句郎
 蒙古斑蒼々とあり菖蒲の日 同
 筍に中華庖丁振り降ろす 同
 穴を出し蛇天帝の見給へる 福山 竹下陶子
 凧の糸風の力を握りしめ 同
 霾や慰問袋の来ずなりぬ 同
 春行くや一語一語に身を削り 熊本 岩岡中正
 麦秋の真中の簡易郵便局 同
 みことばは天より薔薇は地より咲く 同
 寄れば退き退けば舟虫蛸集せり 東京 内藤呈念
 油絵具盛り上げ描く新樹かな 同
 浜風にころがるころがる夏帽子 同

草笛の音のねぢれて終はりけり 神戸 山田佳乃
 更衣何か忘れてゐる軽さ 同
 せせらぎの音分れゆく露の蔭 同
 噴水の止んでやり場のなき視線 香川 湯川 雅
 黒として夏蝶として影落す 同
 雲の峰雲突き抜けてをりにけり 同
 初蝶の風の高さをまだ知らず 直方 林 加寸美
 好日の初蝶ことごとく黄色 同
 都府楼の野の奥行に消えし蝶 同
 更衣心機一転して旅へ 長岡 安原 葉
 クラークにゆかりの大地若葉風 同
 散会のとリラ冷のひとり旅 同
 池の面の花屑に知る盛りかな 大津 石川多歌司
 花冷や吉野が吉野らしくなる 同
 み吉野の人出囃すや百千鳥 同
 木洩日に驚きやすき袋角 袋井 湖東紀子
 袋角歩みはずでに王者なる 同
 袋角悲しきまでに獣の目 同
 城垣の反りの力学新樹晴 徳島 岩田公次
 土佐の夏アイスクリンに噎せにけり 同
 吾を狙ひゐるか熊蜂ホバリング 同
 次々に雲ふれゆきて月今宵 東京 今井肖子
 群雲の早しいよく月の街 同
 十六夜の月影ほのと匂ひけり 同

雑詠句評（九月号より）

葉 ・ 中 正 ・ 美 奇

眞理子・憲 明・むつみ

肖 子・とほ歩・保 佳

静 龍・廣太郎

初花や雨のきのふはもう昔 相模原 木村享史

今年になって初めて咲き出した桜、初花に出会ったときの感動は大きく、誰もが心躍る思いである。待ちに待った初花だけに、その開花の時々刻々の変化は、何人も我を忘れて見入るのである。その感動の大きさを、「雨のきのふはもう昔」と具体的に叙述したことによって、初花の心持が読む側にも見事に伝わってくる。（葉）

毎年遅速はあっても日本の国には必ず桜の花は咲く。その年に咲いた桜に初めて出会った作者なのである。やはり日本人として

は一年のうちで桜の花の出会い、この上もない感動の瞬間であろう。その気持は、それこそ「雨のきのふはもう昔」と思える程なのである。（廣太郎）

亡き夫と春の日分ちゐる窓辺 神戸 長山あや

これは、亡き夫への存問の句である。俳句は客観写生の詩であって、対象との距離感がなくてはならないが、この回想の句には程好い距離感がある。さらに、このあたたかで明るい「春の日」という季節が、作者と「亡き夫」との幸福な日々を示している。この句のポイントは「分ちゐる窓辺」にあつて、「分ちゐる」という言葉を発見したことで、御主人がいま本当に窓辺の作者の隣にいるようなりアリティが生まれた。平明で思いの深い一句である。（中正）

最愛の御主人を亡くされた作者である。運命とは言え、これほど辛い出来事はないだろう。そんな辛い別れがあつて暫くは、未だ現実として実感が湧かない事もあるだろう。ふと窓辺に立ち、確かに御主人の息吹を感じた作者なのである。春の微妙な輝きを通じた心情が感じられる。（廣太郎）

〈以下略〉

天地有情

花子選

老いてなほ母のひとこと母の日に

東京 今井千鶴子

紫陽花の六月はわが生まれ月

同 長岡 安原 葉

道迷ひたる友偲ぶ露涼し

同 東京 稲畑廣太郎

宴涼し聞く軽井沢物語

同 吹田 大橋 暁

寒紅をさして妻の座守りけり

同 同 大橋 暁

寒紅の揃ひてよりの句座となる

同 同 大橋 暁

布引のダム湖を渡る風涼し

同 同 大橋 暁

初夏の日を弾き返して雄滝なり

同 同 大橋 暁

虚ろなる我に友あり余花仰ぐ

同 同 大橋 暁

ジャカラダ風にさゆらぎ花ほろゝ

同 同 大橋 暁

風の出で揺るるひとひら夕牡丹

同 同 大橋 暁

ひとひらの散れば牡丹くづぼるる

同 同 大橋 暁

母在さばおろそかならず更衣

同 同 大橋 暁

この広き若葉明りや吾が母校

同 同 大橋 暁

九十九折登り切りたる汗涼し

同 同 大橋 暁

涼しかり八百八橋てふ祝辞

同 同 大橋 暁

マツカーサー通りし路や花は葉に

同 同 大橋 暁

雨空へ気合入りし四葩かな

同 同 大橋 暁

花束はピンクと決めて母の日よ

龍ヶ崎 今橋真理子

言葉とは時に不自由母の日よ

同 大阪 佐土井智津子

明易や遠き時間を巻き戻し

同 大阪 佐土井智津子

駆け抜けし昭和遙かや風五月

同 東京 大久保白村

明けてゆく明けてゆくみよしの花

同 同 大久保白村

一部屋に蔵王堂組朝寝組

同 同 大久保白村

牡丹や女人は待つ身女人寺

同 同 大久保白村

遍路鈴奥の院まで続きけり

同 同 大久保白村

新幹線降りて東京駅薄暑

同 同 大久保白村

地下鉄を降りて銀座の薄暑に出

同 同 大久保白村

行春の水輪のやうに人逝けり

同 同 大久保白村

惜春の風吹いてゐる水の上

同 同 大久保白村

鱗雲満天にあり俳句あり

同 同 大久保白村

ホ句の外何も知らざる秋灯

同 同 大久保白村

辛夷咲き夜空明るくしてをりぬ

同 同 大久保白村

女どち小生の電話夕薄暑

同 同 大久保白村

日には青葉もうそれだけでもの足りる

同 同 大久保白村

亀鳴きしからはすつぽん鳴きたさう

同 同 大久保白村

青色発光ダイオード 稲畑汀子

ノーベル賞を受賞した青色発光ダイオードの発明は、様々なエピソードを伝えて来ては一般人の興味を誘った。その発明のおかげで、一般家庭にも安くて明るい、それも長持ちする電球が使われるようになった。

私は世の中の流行に対して余り敏感ではないと思っている。しかし、クリスマス頃の頃になると、大阪の御堂筋や、東京駅近くの道路のライトアップの美しさを見ると、ノーベル賞を買った日本人のエピソードを思い出し、自分の生活とは無縁に思っていたのであるが、紡麗でいいなーと楽しんでる。

虚子記念文学館での会合が終わると、外はとっぷり暮れていた。暮れるのが早い頃で、我が家の庭いに隣接する記念館に来ていたので、帰ろうと木戸を開けると、我が家の庭は真っ暗で一枚の開いている雨戸への飛び石はさっぱり見えな。

「転んだら大変！」

独り言を漏らして恐る恐る一歩ずつようやく辿り着いた。

「植田さん、庭に人の気配を察知して、ぱっと電気が付く装置は

ないかしら？」

「いいがありますよ。早速工事に伺います」

庭の何処を歩いてもどこかが照らしてくれるように三本の電柱が立てられた。植田さんは我が家を工事する時の電気工事をやってくれた人なので安心して任せられる。

我が家は、昭和十一年に姑が好んで建てた家なので、その頃の和洋折衷の凝った造りの建物である。戦争で焼けることもなく、教会になつて進駐軍の接収も免れ、兄弟四人での遺産分割で家を大幅に修復し、私は今そこに住んでいる。フランス製のシャンデリア、どの部屋も少し暗めのやわらかい電灯が落ち着いた雰囲気をかもし出している。しかし、電球が切れると大変である。大きな高い脚立を運んできて上り、電球を替えなければならない。

「口丸さんお願い」

庭師の口丸さんに頼む。特に、階段の高い天井から下がっている古い電燈は踊り場から身体を乗り出すようにして複雑な飾りのケースを開けて替えなければならない。階下へ落ちたら命がない。

「電球を」田に替えては如何ですか？ 庭に電気を付けた時にお勧めしようと思っていました。明るいし、電気代が安いし、切

れないで長持ちしますよ。お宅はしょっちゅう電球が切れるらしいのでお勧めしますよ」

「ぜひ、お願いします」

私はすぐに頼むことにした。見積もりで高額なのに驚いたが、替えなくてもいい場所を省くことにした。

「先生がお留守にしなければ、書齋は出来ません。いつがお留守ですか」

東京から帰りて家中を灯すと昼間のような明るさになった。書齋の明るさは有難かった。我が家の句会の際に私は次の句を投句した。

どの部屋もLSDの涼しき灯 汀 子

誰かが選んで下さったので、

「汀子！」と返事をした。

「先生の俳句だったのですか？ 先生！ LSDではなくLEDではないでしょうか」

「あらそうですか。では、LEDに替えて頂いていいですか」

家中が明るすぎる毎日である。

